



●グラフィックデザインブック紹介

【作品名】視覚の共振【著者】勝井三雄

【出版社】光村図書出版

著者はグラフィックデザイナーであり
DIC カラーガイドの制作者の一人。

どのページを開けても洗練されたグラフィックの数々と配色の美しさに目を奪われる。

3部構成になっており1部は作品集、2部は1801～2019年のデザイン文化史と世の中の動き、関わりのあった人物を並列した年譜、3部は武蔵野美術大学教授寺山祐策氏とのデザイン教育に関する対談となっている。A4サイズの大型本だが連休の合間に見るにはもってこいの一冊である。



(副主査 渡邊裕美)

●「JIS Z8105 色に関する用語」から

「JIS ハンドブック 61 色彩 2013」の冒頭に、「用語」の JIS が4項目取り上げられており、色彩科学を学ぶ者にとって、一度は目を通しておきたい定義である。

表は「用語」と「定義」と「参考」とに欄が分けられている。

最初に「JIS Z8105 色に関する用語」である。更に五十音順用語索引と、英語索引の表が続く。

次に、「JIS Z8113 照明用語（抜粋）」、「JIS Z8120 光学用語」、「JIS Z8713 再帰性反射帯一光学的特性一用語」と続く。

「主に測光及び材料の光学的特性に関する用語」の個々の内容は、光、分光分布、輝度、反射、透過、拡散、視感反射率、輝度率光沢度など62項目の用語が解説されている。

「主に測色に関する用語」は、知覚色、心理物理色、表色、条件等色、補色、イルミナント、標準光源、加法混色、グラスマンの法則、三色表色系、三刺激値など106項目。

「主に視覚に関する用語」は、物体色、表面色、開口色、無彩色、有彩色、色相、マンセル表色系、彩度、明順応、プルキンエ現象、色覚異常などの65項目の用語が解説されている。

(永田泰弘)

●日本の伝統的な色名・紺青と群青

群青は、現代では青色無機顔料の名称であるが、伝統的には、ラピスラズリを原料とする岩絵具であったが、高価なので藍銅鉱（アズライト）から作られるようになった。

色は紫みを帯びた青である。古くは、顔料粒子の大きさにより、紺青、群青、白群青と分けられていた。

18世紀にプロシアのベルリンで発明された合成顔料のプルシャンブルーが江戸時代に日本に渡来して「ベロ藍」とか「紺青」と呼ばれるようになり、葛飾北斎の浮世絵などに使われて評判をよび、近代化学産業の時代に工業的に合成されたプルシャンブルーが「紺青」という商品名になって普及したが、優れた有機青色顔料の銅フタロシアニンブルーの普及により、2,000年代に姿を消していった。

一方、アズライト系の無機青色顔料は「群青」、「ウルトラマリンブルー」という商品名で工業化され、塗料やプラスチックの着色色材として普及していった。

古代の文献で金青の表記で残されていたラピスラズリ系の青色顔料は、堅牢さが評価されて現在も工業生産されていて、無機青色顔料の「コバルトブルー」と呼ばれ、油絵の具や塗料用に使われている。

(永田泰弘)